

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成25年3月9日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科附属脳機能総合研究センター

職名・学年 博士課程3年

氏名 芦塚 あおい

助成の種類	平成24年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	第41回国際神経心理学会総会 (41st Annual Meeting of The International Neuropsychological Society)	
発表題目	Semantic memory of environmental sounds in a case with right-dominant semantic dementia	
開催場所	アメリカ合衆国・ハワイ州・ワイコロアHilton Waikaloa Village	
渡航期間	平成25年2月6日 ~ 平成25年2月9日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円
	使用した助成金額	150,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	宿泊費、学会参加登録費、交通費の一部 ----- ----- ----- -----
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成がなければ学会に参加することはできませんでした。大変感謝しております。	

「成果の概要／芦塚あおい」

平成 24 年度京都大学教育研究振興財団

国際研究集会発表助成報告書

京都大学大学院医学研究科附属脳機能総合研究センター

博士課程 3 年 芦塚あおい

研究集会名：第41回国際神経心理学会総会

(41th Annual Meeting of The International Neuropsychological Society)

開催場所：アメリカ合衆国・ハワイ州・ワイコロア Hilton Waikaloa Village

開催期間：平成 25 年 2 月 6 日～平成 25 年 2 月 9 日

国際神経心理学会総会は、その団体の本部をアメリカにおく、神経心理学分野における世界最大規模の学会である。一年に 2 回、アメリカまたはヨーロッパにおいて開催され、世界各国から神経内科医、神経心理学者、心理学者が研究成果を報告するために集う。

おそらく日本においてあまり親しみのない学問分野である「神経心理学」とは、人間の心、言語、行為、認知といった高次機能や精神活動と脳との関りを探る研究分野であり、特にその多くの研究は脳に何らかの障害をもった患者を研究対象とする。それゆえ、学会での講演、発表、討論は脳機能に関わるあらゆるテーマにわたり、それらの研究成果を患者の機能回復などの臨床的な実践に生かすことを目標としている。

私は、神経心理学を研究するために大学院に進学したのであるが、国際的な神経心理学総会に参加するのは初めてであり、緊張をとまなうと同時に期待をして臨んだ。今回の学会のテーマは“Brain Health Through the Lifespan”とされ、ヒトの誕生から死にいたるまでの高次脳機能の理解、人生のライフスパンにわたる脳の健康と脳機能障害への効果的な治療・対応方法を探ろうとする壮大なものであり、大変期待できるものであった。テーマの通り、講演やポスター内容は幼児期から老年期を対象としたものであり、アプローチ方法も多彩であった。幼児期、小児対象研究においては、自閉症、学習障害、小児がん、てんかん、小児の脳の可塑性の特異性に関する議論や、研究の数が比較的小さいとされる小児のイメージング研究についてのシンポジウムが行われた。老年期においては、若年性認知症や 90 歳以上のみを対象とした研究の講義があった。疾患では、全ての年代を通して、依存症、精神疾患、頭部外傷、てんかんなどを対象としたセッション

オンがあり実に多彩な内容であった。アプローチ方法も、臨床における脳機能のイメージング技術の応用、神経内科的評価、神経心理学的評価、神経リハビリテーションへの理解など多岐にわたり、総会の初日の早朝から実践的なワークショップに始まり、臨床的な教育プログラムが同時平行に多数開催され、どのセッションにいくべきか迷うほどであった。

それらの講義のなかには、アメリカにおける神経心理学士の生涯学習プログラムが組み込まれており、単位取得可能な講義は有料であるものも多くあった。私が学会に参加して、初めて知ったのは、神経心理士という職業の臨床における役割の大きさであった。日本には臨床心理士という名の職業はない。アメリカでは、神経心理士が臨床場面において専門職として責任と信頼を得ており、実際に彼らから話をきくことで、その活躍を知り、日本との違いを感じた。

また、セッションで今回特に興味深かったのは、**Sperling** 博士による講義で、認知症発症の10年前にアルツハイマーの早期発見の可能性を探る内容であった。**Neuron** 誌にも掲載された内容であるが、アルツハイマー患者の脳のデフォルトモードの状態を計測することにより、疾患の早期発見につながる可能性を示唆した大変興味深い内容であった。

私自身は、意味性認知症例における環境音課題を用いた意味記憶障害について発表した。意味記憶とは、しばしばエピソード記憶という個人の出来事についての記憶と対比される、辞書的な意味のことである（字を書くものを鉛筆という、など）。意味記憶研究において、言語性意味記憶の報告に比べ、非言語性意味記憶を検討したものは少ないことに着目し、特異的な失語である語義失語を呈した**Semantic dementia**症例2例について、環境音課題を用い、環境音の意味記憶について検討した。研究目的は、環境音と音声言語を比較することで、症例の意味記憶障害が意味記憶そのものの貯蔵障害であるかどうかを、生物、非生物のカテゴリーに分類して検討することである。

症例2例は、**semantic dementia** の症状を呈する左側頭葉優位萎縮症例2例（当時60歳男性/MMSE20点、59歳男性/MMSE21点）であった。

具体的に用いた環境音課題は、カテゴリーを7種類に分け、それぞれ10題ずつとした。同じカテゴリーの写真を4枚同時に呈示し、環境音を聴かせ、対応すると思われる写真を1つポインティングするように指示した。環境音とは別に、検査者による音声言語を症例にきかせ、環境音課題で用いた同じ写真4枚から1つポインティングするように指示した。その結果、両症例について音声言語と環境音の平均結果を比較した場合、第1症例では音声言語、第2症例では環境音の成績が有意に高かった。カテゴリー別では、ほぼ音声言語と環境音の間に差が認められなかったが、楽器カテゴリーにおいてのみ2

症例ともに環境音の成績が有意に高かった。カテゴリー項目を生物・非生物に分類した場合、1例目では、有意に成績が高いのは音声言語における非生物であった。2例目では、音声言語、環境音において生物、非生物間での有意な差は認められなかった。

これらの結果から、音声言語に限定せず、聴覚入力である環境音の意味記憶が右優位萎縮症例によっても認められたことがわかった。今後、リハビリテーションにつなげるためのさらなる理解と研究が必要であると思われる。

国際学会において、世界の専門家に対して自身の研究を発表することにより、研究についてのさらなる改善・発展への効果が得られた。また、専門家を目指す学生との意見交換も刺激となった。

最後に、このような機会を与えてくださった貴財団及び関係者の皆様に心より御礼申し上げます。